

# 大君と薫

——八の宮の存在が意味するもの——

はじめに

「そのころ」と新たに物語が書き始められる橋姫の巻は、宇治大君の父である八の宮の存在を明らかにすると共に、彼の不遇な半生を語っていく。光源氏の類いまれな栄華の陰で、世間から疎外され続けながらも、ひたすら親王としての誇りを守り通そうとした「俗聖」八の宮の生きざまは、それはそれとして宇治十帖の主要な主題の一つとなり得ていよう。しかし八の宮によって結びつけられた「娘」大君と「法の友」薫との不思議な関係が語られ始めると、二人の関係の原点であり、双方の生き方を規定するほど影響を与えているという点から、八の宮の重要性が改めて浮かび上がって来るのである。

大君と薫の関係は、総角の巻では物語の中心に据えられ、いわゆる大君の「結婚拒否」の姿勢も強まって行く。周囲の人々が理

平 林 優 子

想的と信じ熱心にすすめる薫との結婚を、大君が頑なまでに拒み通そうとする根本には、父八の宮を間にはさんで応対していた頃の二人の関係や、その頃の薫に対する大君の感情があるのではないかと思われる。本稿では橋姫・椎本の巻を中心に、八の宮を間にはさんだ大君と薫の関係について考えてみたい。

—

橋姫の巻は、桐壺帝の皇子八の宮の不遇な状況から、やがて薫との仏道を仲立ちとした交流を語り始める。その交流が三年ばかり続いた晩秋のある日、いつものように八の宮に会おうとして宇治へと出掛けて行く薫の様子は、しかしいつもとは明らかに異なっているのである。

川のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり。入りもてゆくままに霧りふたがりて、道も見えぬしげ木の中

を分けたまふに、いと荒ましき風の競ひに、ほろほろと落ち  
乱るる木の葉の露の散りかかるもいと冷やかに、人やりなら  
ずいたく濡れたまひぬ。かかる歩きなども、をさをさならひ  
たまはぬ心地に、心細くをかしく思されけり。(橋姫 一三  
六頁)<sup>注1</sup>

馬にまたがり、狩衣姿で人目を避け、道なき道を露に濡れるの  
もかまわずつき進む。この場面の薫の姿には、恋する女のもとへ  
と通う男の姿が重ね合わされていよう。<sup>注2</sup>さらに語り手は、夜歩き  
に不慣れなためより一層「心細くをかしく」思ふ気持ち<sup>注3</sup>を語り、八  
の宮のことも、仏道のことも薫の心を占めていないかのような描  
かれ方がされている。そして宇治に到着すると、薫の心に呼応す  
るかのように琵琶と箏の合奏が聞こえて来るのである。

しばし聞かまほしきに、忍びたまへど、御けはひしるく聞き  
つけて、宿直人めく男なまかたくなしき出で来たり。(宿直人)  
「しかじかなん籠りおはします。御消息をこそ聞こえさせめ」  
と申す。(薫)「なにか。しか限りある御行ひのほどを、紛ら  
はしきこえさせんにあいなし。かく濡れ濡れ参りて、いたづ  
らに帰らん愁へを、姫君の御方に聞こえて、あはれとのたま  
はせばなん慰むべき」とのたまへば、醜き顔うち笑みて、(宿  
直人)「申させはべらん」とて立つを、(薫)「しばしや」と召

し寄せて、(薫)「年ごろ、人づてにのみ聞きて、ゆかしく思  
ふ御琴の音どもを、うれしきをりかな、しばし、すこしたち  
隠れて聞くべき物の隈ありや。つきなくさし過ぎて参りよら  
むほど、みなことやめたまひては、いと本意なからん」との  
たまふ。(橋姫 一三七―一三八頁)

宿直人の言葉によって「八の宮の不在」が明らかになっている  
が、その後薫の行った行動は注目に値する。多少の遠慮があると  
はいえ、「八の宮に薫の来訪を連絡する」という宿直人の言葉を退  
けて、薫は積極的に姫君との対面を望む気持ちを表明しているの  
である。この言葉については、「一面、社交辞令的な言辭」<sup>注4</sup>との意  
見もあるが、ほとんど姫君たちには関心を示さず八の宮との交流  
をひたすら求め続けて来たこれまでの薫<sup>注5</sup>とは、異質な面を認めて  
よいであろう。さらに薫は、対面を望む言葉を姫君たちに伝えよ  
うとする宿直人をおし止め、琴を近くで聞かせるよう要求してま  
でいるのである。これまでと比べると、驚くほど姫君たちとの接  
点を求めていると言える。

この変化は一体何に由来するのであろうか。いつもと大きく異  
なる点は宇治に八の宮がいないことぐらいであり、これが薫に影  
響を及ぼしているのはまずまちがいないと思われる。もし八の宮  
が宇治に存在しているならば、薫は宮のもとに赴き仏道について

の話をして帰って行くだけで、姫君たちに近づこうなどとは思いつきもしないはずである。道中から知らず知らずのうちに感じていた変化は、「八の宮の不在」によるここではつきりする。薫のひたすら仏道を求める姿は、宮と向き合うことによつて生み出され強化される一面があるとも言えよう。続く薫と宿直人との間で交わされる会話からは、さらに変化して行く薫の姿が窺われる。

(薫ノ)御けはひ、顔容貌の、さるなほなほしき心地にも、いとめでたくなかたじけなくおぼゆれば、(宿直人)「人聞かぬ時は、明け暮れかくなむ遊ばせど、下人にても、都の方より参り立ちまじる人はべる時は、音もせさせたまはず。おほかた、かくて女たちおはしますことをば隠させたまひ、なべての人に知らせたてまつらじと思ひのたまはするなり」と申せば、うち笑ひて、(薫)「あぢきなき御もの隠しなり。しか忍びたまふなれど、皆人ありがたき世の例に、聞き出づべかめるを」とのたまひて、(薫)「なほしるべせよ。我はすきずきしき心などなき人ぞ。かくておはしますらん御ありさまの、あやしく、げになべてにおぼえたまはぬなり」とこまやかにのたまへば、(宿直人)「あなかしこ。心なきやうに後の聞こえやべらむ」とて、あなたの御前は竹の透垣しこめて、みな隔て

ことなるを、教へ寄せたてまつれり。(橋姫 一三八―一三九頁)

宿直人の「八の宮は都の人たちから姫君たちを隠そうとしている」との言葉は、姫君たちに近づこうとする薫へ、それに反する主人の考えを説明するものである。しかし薫は自分を「すきずきしき心などなき人」であると決めつけ、あっさり八の宮の意向を無視し、重ねて姫君たちへの接近を要求している。宮の言葉さえ力を発揮せず、「八の宮の不在」が即、宇治の邸や姫君たちの無防備・薫の態度の変化につながることをこの出来事は示している。もっともこの時の「不在」は一時的なものにすぎず、薫も一応「すきずきしき心などなき人」と自らを規定し束縛しているため、姫君たちが困るようなことはこの時点では起こり得ない。しかしこの出来事は、八の宮の死後、変化して行く薫の姿を象徴的に示しているのではないだろうか。薫にとって八の宮は、目前にいる時は影響を受けるが、そうでなければ影響がうすれゆく存在であることをまず確認しておきたい。

## 二

それではそのような薫に対して、八の宮不在の邸に残された姫君たちはどのように対応するのであろうか。宿直人の手引きによ

って「かいま見」に成功した薫は、「をりあしく参りはべりにけれど、なかなかうれしく、思ふことすこし慰めてなん。かくさぶらふよし聞こえよ。いたう濡れにたるかごとく聞こえさせむかし」(橋姫 一四一頁)と姫君たちに心ひかれる自分を押さえかねて宿直人に対面の申し込みを再度依頼し、大君と初めて会話を交わす機会をやや強引に得る。

(薫①)「この御簾の前にははしたなくはべりけり。うちつけに浅き心ばかりにては、かくも尋ね参るまじき山のかけ路に思つたまふるを、さま異にてこそ。かく露けき旅を重ねては、さりとて、御覧じ知るらんとなん頼もしうはべる」といともめやかにのたまふ。若き人々の、なだらかにもの聞こゆべきもなく、消えかへりかかやかしげなるもかたはらいたければ、女ばらの奥深きを起こしこいづるほど久しくなりて、わざとめいたるも苦しうて、(大君)「何ごとと思ひ知らぬありさまにて、知り顔にもいかがは聞こゆべく」と、いとよしあり、あてなる声して、ひき入りながらほのかにのたまふ。(薫②)「かづ知りながら、うきを知らず顔なるも世のさがと思つたまへ知るを、一ところしもあまりおぼめかせたまふらんこそ口惜しかるべけれ。ありがたう、よろづを思ひすましたる御住まひなどに、たぐひきこえさせたまふ御心の中は、何ごととも涼

しく推しはかられば、なほかく忍びあまりはべる深さ浅さのほども分かせたまはんこそかひははべらめ。世の常のすきずきしき筋には思しめし放つべくや。さやうの方は、わざとすすむる人はべりともなびくべうもあらぬ心強さになん。おのづから聞こしめしあはするやうもはべりなん。つれづれとのみ過ぐしはべる世の物語も、聞こえさせどころに頼みきこえさせ、また、かく世離れてながめさせたまふらん御心の紛らはしには、さしもおどろかせたまふばかり聞こえ馴れはべらば、いかに思ふさまにはべらむ」など多くのたまへば、つつましく答へにくくて、起こしつる老人の出で来たるにぞ譲りたまふ。(橋姫 一四一―一四三頁)

長々と引用したが、つまりはほとんど言葉を発しない大君を前にして、薫が一方的に自分の思いを述べているのである。薫②の言葉を要約すれば、「世間一般の色恋の関係としてではなく、お互いのさびしさを紛らわせ慰め合う程度の話し相手としてお付き合い願いたい」ということになる。このような態度は、姫君たちをかいま見て、懸想人ぶって対面を申し込んだ時とは大分変化している。この引用した部分に限っても、①と②の言葉を比べると、薫が「懸想人」から「まめ人」へと変化していることが窺えよう。薫は姫君たちに思いを訴えかけておきながら、自ら引つ

込めるようなことをしているのである。この変化はどうして起きるのであろうか。これについては、対面している相手、大君の態度に注目すると納得がいく。

八の宮不在の宇治へと向かう道中から、姫君たちの姿をかいま見て対面したいと願う薫の姿は、一貫してごく普通の懸想人と何も変わったところは見られない。むしろこの時の気持ちは、前に述べたように、気品があり美しい異性を求める積極的なものであったと言えよう。薫の①の言葉は、ひき続き、姫君にひかれる思いを素直に訴えかけており、相手の出方次第では他の方向へと話が進んで行く可能性を秘めている。しかし対する大君の態度は、八の宮不在の宮家を代表し、都からはるばるやって来た客人に対して落度がないよう気を使う主人としてのそれである。<sup>注6</sup> 控え目ながら必死に代役をこなそうとする大君の姿は、不在である八の宮の存在を強く感じさせ、高ぶった薫の心を静めるのに十分であったと思われる。「かいま見」の夢のような思いは失せ、薫は現実へと帰って行かざるを得ない。この後、薫の態度は変化し、八の宮のことを持ち出して自分が色恋とは無縁であることを強調し、「世の常のすきずきしき筋」ではない交流を大君に求めるようになるのである。

この初めての対面が、大君と薫の関係に与えた影響は大きい。

薫はこの時大君の態度(八の宮の存在)にひきづられて、自らを懸想人ならざる懸想人として位置づけてしまったのだが、その結果、大君に懸想する自分の素直な心を表明出来なくなってしまうのである。以後、大君に思いを伝えようとする、薫の言葉はいつも歯切れの悪いものにならざるを得ない。また大君の方も、薫が結果的には色恋ではない交際を求めたことで、薫との関係を八の宮の縁によるもの、父の「法の友」との父を仲立ちとする関係と思ひ込んでしまう。初めての対面において、大君と薫のお互いに対する姿勢はほぼ定まり、以後同様の交流が形を変えて繰り返されていくのである。

このような関係は、薫が帰京するにあたり二人の間に贈答歌が交わされる場面でも見受けられる。「かのおはします寺の鐘の声」(橋姫 一四八頁)によって八の宮の存在を強く意識させられた薫は、「あさばらけ家路も見えずたづねこし楨の尾山は霧こめてけり 心細くもはべるかな」(橋姫 一四八頁)という歌を姫君たちに贈る。この歌は湖月抄師説が指摘する<sup>注7</sup>ように、表面では八の宮不在による心細さを詠んで姫君たちを思いやりながら、一方では自分の思いを受け止めず、父の「法の友」として一般的な対応しかしようしない大君への不満も込める複雑なものとなっている。しかしこれに対する「雲のゐる峰のかけ路を秋霧のいとど隔

つるころにもあるかな」(橋姫 一四八頁)という大君の返歌は、薫の歌から八の宮不在による心ぼそさのみを意識的に受け取り、より一層強調して自分の孤独を訴える内容となっているのである。

この場面において大君は心を込めて返歌しているが、それは薫の歌が大君に心ひかれる自分の思いをストレートに訴えず、二人に共通する八の宮の不在を嘆いていることによる。父八の宮の代役を必死に務める大君にとって、薫の自分への懸想は決して受け入れられないけれども、八の宮を思う気持ちや八の宮不在による彼女の心細さを思いやる気持ちはありがたいのである。大君に薫が好ましく受け取られるのは、懸想抜きで自分や八の宮を思いやってくれる時のみである。八の宮の娘である大君は、あくまでも薫が父を大切に思い、その縁で自分のことも大切に思っているのだということにこだわり、父、妹、自分だけという孤独な境遇から、優しさを示す薫を好ましく思うのではないだろうか。薫に対して恋心を抱くような状態からはほど遠いのである。大君は薫を異性として意識していないと言えよう。<sup>注8</sup>

同様なことは、続く薫が都へ帰る直前の二度目の和歌の贈答場面(橋姫 一四九―一五〇頁)においても言える。また薫の帰京後、二人の間では文のやりとりも行われているが、大君と薫には、

向き合いながらも素直に心が通わずかみ合わないもどかしさがいつもつきまとっている。なぜ二人の関係はアンバランスなものにならざるを得ないのであろうか。それは、お互いが相手に抱いている気持ちが異なっていることが一番の原因であり、加えて当事者たちだけでなく、二人それぞれと深い関係のある八の宮の存在も考慮する必要があるように思われる。

八の宮は宇治に戻った後、自分の不在中、「法の友」薫と「娘」大君との間で文が交わされたことを知らされる。「何かは。懸想だちて、もてないたまはんも、なかなかうたてあらん。例の若人に似ぬ御心ばへなめるを、亡からむ後もなど、一言うちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」(橋姫 一五三頁)という八の宮の言葉からは、薫を「懸想人」としてではなく、あくまでも自分との縁からとらえようとする姿勢が見受けられよう。このような八の宮の姿勢は、「娘」大君の姿勢とぴったり重なり合い、大君の態度が父八の宮の考えに基づいていたことがはつきりするのである。また、薫が大君の態度に接し自分の思いを隠そうとしたのも、どうやら八の宮の意向に気づいていたためらしいと想像出来る。大君と薫は「八の宮不在」の宇治にありながら、八の宮の存在を意識して対面していたわけである。薫は大君の態度によって自分の思いを訴えることをやめたが、八の宮の存在が大君と

薫双方に影響を与え二人の関係を決めていたとも言えよう。大君と薫の関係は、間接的にはあるが八の宮の影響下で出発したのである。次に、八の宮の直接的な影響について考えたい。

### 三

十月になって宇治を訪れた薫は、今度は八の宮と対面している。二人の間でいつものように仏道を仲立ちとした交流が行われた後、話は琴のこと、さらには姫君たちの後見依頼へと移るが、この場面における薫と八の宮を姫君たちを中心にしてとらえ直すと非常に興味深いものが見えて来よう。まず薫が琴の話をきっかけにして、なんとか姫君たちの合奏を聞こうと試みる。八の宮はまわりくどく薫に琵琶をすすめたり自らも琴を弾いたりした後、初めて姫君たちにも合奏するようすすめているのである。ここでは姫君たちの保護者として八の宮がすべてを取り仕切り、薫との関係にも積極的に介入していて、先の不在時とは大きく事情が異なる。八の宮が存在する限り（不在でなければ）、薫は姫君に直接対面を申し込むことなど出来ず、琴の合奏一つ聞くにしても、まず交渉する相手は八の宮なのである。世間では今をときめく薫であっても、八の宮の存在する宇治において勝手は許されない。薫の大君への思いの行方も、すべては八の宮次第であり、薫はいつ

も宮がどう考えるかを配慮しなければならないと言えよう。八の宮は一段高いところから、大君と薫の関係をコントロールする立場にある。八の宮と薫、八の宮と大君という関係が、大君と薫の關係に与えている影響は決して小さくないはずである。八の宮の薫への影響を明らかにするため、二度目の姫君たちの後見依頼（一度目の依頼は、先にあげた薫から大君あての手紙を見たおりの宮の言葉の中でその存在が示されているが、実態がはっきりと分からないため除外する）、そして最後の対面の時の後見依頼について検討しておきたい。

- ①（八の宮）「人にだにいかで知らせじとはぐくみ過ぐせど、今日明日とも知らぬ身の残り少なさに、さすがに、行く末遠き人は、落ちあぶれてさすらへんこと、これのみこそ、げに世を離れん際の絆なりけれ」とうち語らひたまへば、心苦しう見たてまつりたまふ。（薫）「わぎとの御後見だち、はかばかしき筋にはべらずとも、うとうとしからず思しめされんとなん思ひたまふる。しばしもながらへはべらん命のほどは、一言も、かくうち出できこえさせてむさまを違へはべるまじくなん」など申したまへば、いとうれしきことと思しのたまふ。
- （橋姫 一五八―一五九頁）

- ②（八の宮）「亡からむ後、この君たちをさるべきもののたより

にもとぶらひ、思ひ棄てぬものに数まへたまへ」などおもむけつつ聞こえたまへば、(薫)「一言にてもうけたまはりおきてしかば、さらに思ひたまへ怠るまじくなん。世の中に心をとどめじとはぶきはべる身にて、何ごとも頼もしげなき生ひ先の少なきになむはべれど、さる方にもめぐらひはべらむ限りは、変らぬ心ざしを御覧じ知らせんとなむ思ひたまふる」など聞こえたまへば、うれしと思いたり。(椎本 一七九頁)

①は二度目の後見依頼、②は最後の対面のおりの後見依頼である。この二つの後見依頼の間には実に九カ月もの時間の経過があり(①は十月上旬、②は翌年の七月の出来事である)、薫と八の宮双方の事情もそれぞれ大きく変化しているにも拘わらず、同じような応答がなされていることがかえって目をひこう。この間、薫はこれまでずっといぶかしく思い続けて来た出生の秘密を弁の尼からはつきりと知らされ、八の宮は自らの死を強く意識すること、二人とも人生観を大きく変えざるを得ない状態に直面しているが、とり交わされる言葉にほとんど変化はないのである。二人は大きな出来事に直面しながら、何も変化しないのであろうか。いや、決してそうではなからう。二人の内面はそれぞれ変化しているのだが、お互い向き合うと、前と同様の態度をとらざるを得ない関係であると考えた方がよいようである。

八の宮は①と②の間に、「宮は重くつつしみたまふべき年なりけり。」(椎本 一七七頁)ということもあって、自分の死をはっきりと自覚し、亡き後の姫君たちのことを切実に心配するようになっていく。そのため、①では姫君たちの結婚を具体的に考えていないのに、②では積極的に薫と姫君たちの結婚を望むようになる。<sup>注9</sup>①よりも②の方が姫君たちを託す姿勢が強まっているのはそのためであらう。しかし八の宮は、薫と大君との交流を懸想によるものではないという立場をとって来たこともあって(それはここに至っても堅持されたままである)、結婚話を持ち出しづらい。また薫の方も、八の宮と「法の友」としてしか交流して来なかったため、そのまま理想の青年の役を演じ続けてしまうのである。薫と八の宮の関係は状況に応じて変化することが出来ない。このような二人の関係は、そうであることよってのみ、落魄の八の宮と今をときめく薫との交流が可能になるという二人を取り巻く現実とも決して無縁ではないであらう。薫と八の宮の関係は、世間的・世俗的には圧倒的に強い力を持っている薫が、八の宮の勢力基盤である宇治にやって来て、その上仏道を仲立ちとすることで辛うじてバランスを保っている。姫君たちの結婚問題を公然と持ち出すのは、薫と八の宮の関係に世俗や現実を直接持ち込むことにつながる。それらを意識的に排除し、薫の姫君たちへの思い



を「世の常の懸想」（異性に心ひかれる思い）と認めないことで八の宮の誇りは守られて来たと言えよう。宮家の姫君ともあろうものが懸想などという私的感情によって結ばれてはならないのである。薫は八の宮に、八の宮は薫に自らの変化を示すことが出来る。結果として二人の関係は何も変わらない。二人の間では、本心がどうであるかよりも、これまで保たれてきた関係を維持する方が優先され、「八の宮亡き後には、宮との縁から姫君たちの面倒を薫がみる」というあいまいな約束が繰り返されるしかないと言える。物語は八の宮の死による「不在」を予感させ、薫と八の宮の關係に微妙な揺さぶりをかけながらも、変化出来ない硬直した二人の關係を描き出している。<sup>注10</sup>②の後見依頼がなされた後、双方の接近を切実に願う八の宮のはからいによって、薫は姫君たちと対面するが、そこには姫君たちにあまり熱心になれない薫の姿がある。

世の常の懸想びてはあらず、心深う物語のどやかに聞こえつ  
つものしたまへば、さるべき御答へなど聞こえたまふ。三の  
宮いとゆかしう思いたるものと心の中には思ひ出でつつ、  
わが心ながら、なほ人には異なりかし、さばかり、御心もて、  
ゆるいたまふことのさしも急がれぬよ、もて離れて、はた、  
あるまじきことはさすがにおぼえず、かやうにてものををも  
聞こえかはし、をりふしの花紅葉につけて、あはれをも情を

も通はすに、憎からずものしたまふあたりなれば、宿世こと  
にて、外ざまにもなりたまはむは、さすがに口惜しかるべう  
領じたる心地しけり。（椎本 一八三頁）

「世の常の懸想でない」という態度を薫に求め続ける八の宮の  
存在によって、薫の心は屈折したものとならざるを得ない。薫に  
とってしがらみの増える結婚は決して望ましいものではなく、「世  
の常の懸想でない」ことが前提のまま結婚を承諾するのは気が進  
まないのである。薫は自分の大君への気持ち「世の常の懸想で  
ある」と本当は八の宮や姫君たちに認めて欲しいのではないだろ  
うか。しかし姫君たちは、八の宮の影響によって、薫が「世の常  
の懸想でない」という態度をとらなければ答えてもくれないので  
ある。姫君たちを恋しく思う薫にとって、八の宮の存在は最後ま  
でマイナスに働いていると言えよう。八の宮は自らの死を前にし  
て姫君たちと薫を結びつけようと努力し、道筋をつけながらも、  
心理的な溝を作ってしまった。長年にわたる姫君たちへの懸  
想を認めない八の宮の姿勢が、影響を及ぼしているのである。一  
方八の宮は、姫君たちに対しては次のような訓戒を遺す。

かつ見たてまつるほどだに思ひ棄つる世を、去りなん後のこ  
と知るべきことにはあらねど、わが身ひとつにあらず、過ぎ  
たまひにし御面伏に、軽々しき心ども使ひたまふな。おぼろ

けのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあぐられたまふな。ただ、かう人に違ひたる契りことなる身と思しなして、ここに世を尽くしてんと思ひとりたまへ。ひたぶるに思ひしなせば、事にもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして、女は、さる方に絶え籠りて、いちじるくいとほしげなるよそのもどきを負はざらむなんよかるべき（椎本 一八四―一八五頁）

八の宮は自分の死後、姫君たちが八の宮家の体面・誇りを傷つけないよう繰り返し言い置いている。大君がこの言葉を後に度々思い出していることから、遺戒の影響の大きさが窺えよう。<sup>注11</sup>しかし大君の生き方を強く規定するのは、遺戒そのものではなく、この遺戒に象徴的に示されている八の宮が人生をかけて必死に守り通して来た親王家としての誇りであると思われる。八の宮家の誇りを父に代わって守り通していくことが、最後に宮から姫君たちへ重い課題として引き継がれたのである。そしてこの課題は、二人の姫君たちのうち、家長の地位を引き継ぐ大君の方により重くのしかかることになる。

すでに薫に姫君たちの後見依頼をし、薫も一応了承しているにも拘わらず、ここで八の宮がこのような訓戒を遺す理由について、「八の宮は、待ち続ける時間の流れの中で、「薫は、保護者八の宮

に許しを得て正式な妻として姫君たちを後見する意識が希薄である。」と見なさずにはいられなくなった。そうであるなら、彼としては姫君たちに厳しい言葉——結婚禁止・宇治出郷禁止——を遺すほかない。<sup>注12</sup>という意見がある。確かにそうであろう。薫が曖昧な態度をとればとるほど、八の宮の心配は増し、姫君たちに遺す言葉も厳しいものとならざるを得ないのである。しかしこの遺戒には、薫の態度に関係なく、何がなんでも八の宮が姫君たちに言い遺しておかなければならないものも含まれている。八の宮は自分が半生をかけて何にもまして大切に守り通して来た親王家としての誇りを、姫君たちも必ず守って行くよう強く求めずにはいられない。親王の娘として誇りたかく生き続けるには、召人待遇を受けるようなことがあつてはならず、そのための「結婚禁止・宇治出郷禁止」であるとも言えよう。<sup>注13</sup>

また、この親王家としての誇りを守ることと姫君たちの結婚という現実がからんだ時、相手の男との関係が八の宮がこだわった「世の常の懸想による関係でない」ことが一層重要な問題として浮かび上がって来るのである。八の宮の姫君たちに対する態度もまた、死を前にしながら結果的には何も変化せず、父から宮家の誇りを託された大君は、薫との関係が「世の常の懸想による関係でない」ことにあくまでもこだわりの続ける。言い換えれば、大君

は「自分が薫を異性としてどう思うか」とか、「薫が自分を異性としてどう思っているのか」ではなく、ひたすら八の宮家の誇りを傷つけられないことのみに関心を集中させねばならないのである。姫君たちにとり好ましいのは、「恋しく思ってくれる男」よりも、「親王の娘として大切に扱ってくれる男」の方であると言えよう。八の宮が宮家の誇りを大切にしよう強く言い置くことで、薫の素直な大君への思いが受け入れられる可能性は閉ざされてしまふのである。

本心に反しながら「世の常の懸想でない」態度を示さねばならない薫と、八の宮家の誇りを背負って「世の常の懸想でない」態度の相手しか認めることの出来ない大君。八の宮によって結びつけられがんにがために規定された二人の関係は、この後どうなるのであろうか。八の宮の存在がその死によって永遠に消滅する時、二人の関係もまた、大きな転換点を迎えるのは当然のなりゆきと言える。

#### 四

八の宮は八月二十日、山寺にて病のため死去する。父の死に目に会えなかったことも手伝い、姫君たちの深い悲しみにうち沈む様子が描かれ、薫や同じく心を寄せる匂宮からも様々な配慮がな

されるが、しかしこの二人に対する姫君たちの態度は大きく異なっている。

①(薫ハ)阿闍梨のもとにも、君たちの御とぶらひも、こまやかに聞こえたまふ。かかる御とぶらひなど、また訪れきこゆる人だになき御ありさまなるは、ものおぼえぬ御心地どもにも、年ごろの御心ばへのあはれなめりしなどをも思ひ知りたまふ。(椎本 一九一頁)

②兵部卿官よりも、たびたびとぶらひきこえたまふ。さやうの御返りなど、聞こえん心地もしたまはず。(椎本 一九二頁)

薫も匂宮も共に八の宮の死を悼んでいることには変わりがないのに、対する姫君たちの態度は正反対である。これは二人がどのような気持ちからお悔やみを述べているかの違いであろう。①の薫が八の宮を亡くした悲しみを共有し姫君たちの心に寄りそっているのに対して、②の匂宮は姫君たちを恋慕する気持ちから手紙を寄せているに過ぎないのである。匂宮は「忌がはてた」ことをひと区切りと考えるが、姫君たちにとっては悲しみがうすれることなど全くない。匂宮は八の宮との交流がほとんどなかったせいもあり、姫君たちの悲しみを一般的にしか理解しようがないのだが、そんな匂宮に対し大君は②の後で、誇りを傷つけられるような不都合が起きるのではと警戒してまでいる。姫君たちが求めて

いるのは、あくまでも懸想からではなく、亡き八の宮を共にしのび悲しんでくれる人なのである。そのため、①の薫は姫君たちに好意を持って受け入れられていると言えよう。大君にとって薫は異性としてではなく、八の宮家に縁のある者として宮家の誇りを守る側に立ってこそ、好ましい人物として認められるのである。

この後薫は忌が過ぎてから宇治へ見舞いに自ら訪れ、あくまでも亡き八の宮の縁から姫君たちに交際を求め、懸想めいたふるまいなどしたことがないと強調する。やはり大君は好意的に対応しているが、このような二人の関係がすでに八の宮の生前に見られたことに注意する必要がある。薫が八の宮を立て、「世の常の懸想でない」という態度をとることで、大君は八の宮家の誇りが傷つけられないと安心出来るのである。また薫のこのような態度は、八の宮の死に対して彼自身も深い悲しみを抱いているためであり、そういう意味においては、八の宮は薫に対して生前と同様の拘束力をまだ保持していると言うことも出来るよう。

しかし、薫のこのような態度はやがて変化していく。八月二十日の八の宮の死から四カ月ばかり過ぎた新年を前にして、「かやうにてのみは、え過ぐしはつまじと思ひなりたまふも、いとうちつけなる心かな、なほ移りぬべき世なりけりと思ひゐたまへり。」（椎本 二〇六頁）と薫は大君への自分の思いが懸想であることをは

っきり自覚すると共に、大君に恋情を訴えかける。薫の中で八の宮の影響がうすれゆくに従い、本心が現れ出て来たと言えようか。薫にしてみれば、これまで八の宮によって抑制され歪められて来た自分の本心を訴えかけたに過ぎないのだが、対する大君は「……思はずに、ものしうなりて、ことに答へたまはず。」（椎本 二一〇頁）とはっきりと拒否の態度をとる。これまで懸想でないかのよう装う薫の態度をそのまま信じて来た（信じようとして来た）大君にとって、薫の変化は裏切りでしかない。大君はあくまでも薫に「世の常の懸想でない」という態度を求め、そのような関係でなければ八の宮家の誇りは守れないと強く思い込んでいるのである。大君と薫の関係は、八の宮の死によって完全にすれ違い始めていと言えよう。

薫は八の宮の生前にも、宮が不在のおり大君に向かって思いを訴えかけたことがあったが、八の宮の死による不在は薫を自由に解き放ち、以後薫の心の中では宮の存在が小さくなるに従って、大君への恋情が膨らんでいくのである。そのような薫の心を「まめやかなる人の御心は、またいとことなりければ、いとどのかに、おのがものとはうち頼みながら、女の心ゆるびたまはざらむ限りは、あざればみ情なきさまに見えじと思ひつつ、昔の御心忘れぬ方を深く見知りたまへと思す。」（椎本 二一五―二一六頁）と語り

手は語るが、女の態度が変わるまでいつまでも呑気に待とうという一風変わった薫の態度は、あくまで「世の常の懸想でない」とに固執する大君に対して、自分の気持ち「世の常の懸想である」ことを認めるよう求める意味もあるのではないか。薫は八の宮の死の翌年の夏、椎本の巻の巻末では二度目の「かいま見」を行い、ひたすら大君への思いをつのらせるのである。<sup>注14</sup>

一方、大君の父八の宮を亡くした悲しみはうすれることがない。時が過ぎ、周囲の人々が次々と気持ちに区切りをつけて行く中であって、姫君たちだけは父の死が実感・現実として迫るため、一層悲しみが深まるようでもある。大君は保護者である父を失い、宮家の誇りを自分が守らねばという強い自覚から、薫の懸想にはより頑な態度を示すようになっていく。大君の中では生前と同様、父の存在が大きな位置を占め続け、薫を受け入れられるのは、八の宮を亡くした悲しみを共有出来る時などに限られる。大君は父との関わりの延長においてしか薫をとらえることを自らに許さないのである。薫に比べてはるかに強い影響を大君は八の宮から受けていたことが窺えよう。

八の宮の死によって変わりゆく薫と、父の思いを受け継ぐからこそ変わろうとはしない大君。二人の関係は八の宮の死後、隔たりを広げ続けていくように思われる。この後、物語は一对一で向

きあう大君と薫の関係を描き始めるが、これまであまり表面に出ることのなかった大君と薫とのすれ違いが目立つ。大君は薫の思いを打ち明けられるたびに、明らかに困惑している。

（薫が）あざやかならず、もの恨みがちな御気色やうやうわりなくなりゆけば、わづらはしくて、うちとけて聞こえたまはむこともいよいよ苦しけれど、おほかたにてはありがたくあはれなる人の御心なれば、こよなくももてなしがたくて対面したまふ。（総角（5）二二三頁）

大君は薫の変化にとまどうのだが、邪険に扱える相手ではないため、苦しみは深まるしかないのである。大君を異性として意識し求めるという薫にとってはごく自然なことが、大君を追い詰めていく。二人の関係が大君の死によって終わらなければならぬ原因は、八の宮の影響下での出発点においてすでに内包されていたのである。大君が変化することを望まず、八の宮の意向に従い親王家の誇りをひたすら守ろうとしたその時から、大君と薫の思いが重なり合う可能性は消えて行き、悲劇が始まったのではないだろうか。

#### むすびに

本稿では、大君と薫の関係に八の宮がはたしている役割につい

て考えて来た。八の宮の死後新たに始まるかに見える二人の関係には、すでに八の宮生前中の様々な問題が引き継がれ、複雑な背景が存在しているのである。二人の関係は、山積みになされた問題を前にしてすれ違い隔たっていくのだが、その場合より多くの問題を背負わされているのは、八の宮の影響をより強く受け苦境の立場に立たされている大君の側であろう。八の宮の死によって制約がなくなり思いを訴えかけて来る薫に対して、変わることに許されない大君はこの後どのように対応するのか。また、彼女が薫に対して抱いている思いとはどのようなものであるのかを一層明らかにすることが今後の課題である。

## 注

注1 以下本文は『新編日本古典文学全集 源氏物語(5)』(小学館)による。

注2 夕顔のもとへと通う光源氏、落葉の宮のもとへと通う夕霧の姿が思っておこされる。

注3 以下、語り手によって語られていても、登場人物の思いにそうものは登場人物の気持ちとして考えたい。

注4 『新編日本古典文学全集 源氏物語(5)』一三八頁頭注二四これ以前の薫の態度については「仏の御隔てに、障子ばかりを隔ててぞおはすべからむ。すき心あらん人は、気色ばみ寄りて、人の御心ばへをも見まほしう、さすがにいかたとゆかしうもある御けはひなり。されど、さる方を思ひ離る願ひに山深く尋ねきこえたる本意なく、すきすきしきなほざり言をうち出であざればま

んも事に違ひてや、など思ひ返して、宮の御ありさまのいとあはれなるをねむごろにとぶらひきこえたまひ、たびたび参りたまひつつ、……」(橋姫 一三三頁)と述べられていた。

注6 大朝雄二「源氏物語・宇治の女はらから論(上)」(『文学』一九八六年三月)

大朝氏は「八宮不在に際しては、大君がいわば家刀自として万事をとり仕切る状態が慣例であった」と述べ、八の宮不在のおり、大君に課せられる役割を指摘しておられる。

注7 北村季吟 有川武彦校訂『源氏物語 湖月抄(下)増注』(講談社学術文庫 三三八頁)

この薫の歌について、湖月抄・師説は「はるばるとたづねきし宮の方は、霧ふかくしてかひもなく、又歸らん家ぢも見えわかでせんかたなきと、すこしかこちたる心也。姫君にかくおぼつかなくて、ただには歸りがたきと、やすらへるさまなるべし。」と説明している。

注8 山上義美「『源氏物語』宇治の大君像をめぐって」(『文芸研究』一九八八年一月)

山上氏は「私見によると、結婚を拒む大君の姿勢及び思念は繰り返し描かれても、恋する彼女の確実な描写は見当らない。大君には薫に対する共感と断絶が見られ、人間として融和、共感しつつも、異性としての彼は徹底して拒み続ける。」と述べ、大君の薫に対する思いが恋情ではないことを指摘しておられる。別に稿を改めなければならぬが、私も「大君は最後まで薫に対して恋情を抱くことはない」という立場に立つ。

注9 高野裕子「八の宮小論——遺戒の解釈をめぐって——」(『東京女子大学日本文学』一九八三年三月)

高野氏は①と②の八の宮の後見依頼を、八の宮をとり巻く事情を含めて詳しく分析し、①の段階では「八の宮は具体的には姫君たちの結婚を考えてはいない。」のに対して、②では「八の宮が最後に薫に遺した言葉は、後見という点に関して曖昧なものではなく、薫と姫君たちとの結婚を望むものとしてよいと思う。」と結論

注 10 づけておられる。  
原岡文子「宇治の阿闍梨と八の宮——道心の糸——」(「むらさき」  
一九七三年六月)

金盛友子「薫と八宮」(「東京女子大学日本文学」一九八四年三月)  
薫は八の宮の置かれていた状況のつらさが分からず、八の宮も薫  
の抱えている問題(出生の疑惑に由来する存在の不安)を知らな  
い。相手の真の姿を理解せず、仏道を共に求めることによつての  
みつながらる関係は決して深いものとはならないはずである。

注 11 長谷川政春「宇治十帖の世界——八宮の遺言の呪縛性——」(「国  
学院雑誌」一九七〇年十月)

長谷川氏は八の宮の遺言が薫と大君双方をいかに呪縛し、影響を  
与えているかについて考察しておられる。

注 9 に同じ

注 12 増田繁夫「源氏物語の結婚と屋敷の伝領」(『源氏物語試論集 論  
集平安文学4』勉誠社 一九九七年九月) など

注 13 女が自分の家や財産を持たず男の家に引き取られた場合、妻とし  
て認められないのが一般的であった。

注 14 薫が大君への思いをつのらせる背景には、八の宮の死以外にも、  
ライバル匂宮の存在や、出生の秘密を知ってしまった不安から切  
実に自分を理解してくれる人を求める薫側の事情もあると考  
える。

(ひらばやし ゆづこ 本学助手)